

「平成九年度大会シンポジウム」特集・歴史としての「東北」

## 歴史としての「東北」

笠井 昌昭

このたび、岩手大学において本学会の大会が開催されるにあたり、「歴史としての東北」がシンポジウムのテーマとして設定されました。

従来、何かにつけて、中央・ないしは中央の生み出してきたもののみが、歴史学の研究テーマとなってきた。しかし、近年、地域の独自性を明らかにしようという観点から、さまざまな視野の広がりが求められ、また試みられていることは周知のところであります。本テーマもまた、そのような動向の上に立つものであることはいうまでもありません。そしてここでは、古代から近代までを通じてさまざまな展開してきた東北像の中に、その底辺において何か一貫するものをさぐりえないかということをもささやかな願望としております。

本日は、四人の方々にお話していただくわけですが、日本の歴史をふりかえりましたときに、中央に対して、いわゆる「東北」の地が独自の文化を生み出しますのは、比較的新しい時代のことです。

しかし、古代から——少なくとも大化改新の前夜にあたるころから、東北は中央の意識の中にはいつてきております。その具体的な姿については「古代の中央における東北像」のなかで扱われることになりますが、やがて早くも一〇世紀前半には、『伊勢物語』に見られるように、それまで絶対的価値を有していたはずの「都」

にあり、わびで、「あづま・みちのく」に一つの理想郷を求めるような風潮が示されてきます。本日は四人の方々によって、

「古代の中央における東北像」

「みちのく観の成立」

「安藤昌益」

「石川啄木と宮沢賢治」

がとりあげられ、論じられることになっていますが、大きくいえば、前半において「外から見た東北」が、後半において「内なる東北」が考察されることになります。

さて本学会には、哲学・倫理学・歴史学・宗教学・民俗学・国文学等々、まことに多方面にわたる領域の方々が参加されており、それぞれ異なった視野からの思想史研究が展開され、また試みられています。それが本学会にふくらみをもたせていることは喜ばしいことでもあります。ところが一方、その研究対象ということになると、依然として、「ロゴス化された思想」だけが思想史の研究対象である、という傾向が抜けきらないようにおもわれます。昨日、第一・第三会場に分かれての数多い研究成果の報告がありました。古代を扱ったものはほとんどありません。「ロゴス化された思想」のみが思想史の研究対象とされる限り、日本古代思想史の成立する土壌はきわめて薄いことになるといわなければなりません。

しかし、「我思う、故に我あり」というにしろ、「我あり、故に我思う」というにせよ、その立場は違いますが、人間は思惟することによって行動し、思惟することによってその存在を明確ならしめます。一つ一つの行為をそれじたいの中に思想があるわけです。ですから、R・G・コリングウッドは「すべての人間の歴史は思想の歴史である」とさえ申しました。したがって、「ロゴスとしての思想」ばかりではなく、「ロゴス化される以前の思想」を過去事実の中から取り出してくることは、これまた思想史研究に課せられた課題だともいえます。その意味において、本日の前半のお話はいへん益するものがあると存じます。

先ほど、『伊勢物語』のころから、「あづま・みちのく」がひとつの理想郷として浮かび上がってくることに

ふれました。けれどもその淵源は、すでに奈良時代の東北親のなかにあるようにおもわれます。あとでまたそれぞれの方からお話があるでしょうが、『日本書紀』の景行天皇二十七年条には、北上川流域地方を指すかとおもわれる「日高見国」についての記述があり、この地に住む人を「蝦夷」といい、その性格は「勇悍」であるといい、また「土地は沃壤で、曠大である」とする記述があります。この情報によって、日本武尊が陸奥国まで遠征することになるのですが、日本武尊の遠征のことはさておくとしても、また右の情報が景行天皇の時のことであったということもひとまずおくとして、少なくとも『日本書紀』編纂の時代には、「みちのくには肥沃な土地が広がっている」という情報を、中央政府が手にしていたことは間違いありません。そして、その後、東大寺大仏造営のさい、像は完成したものの、大仏に塗る金のないことに悩んでいる聖武天皇のもとに、陸奥国から、それまでわが国では産しないと思われていた金が献上されたことの意味は、これまた大きいものがあるとおもいます。

陸奥国からの黄金献上の喜びの詔に应えて、大伴家持は、

天皇の御代栄えむと東なるみちのくに山に金花咲く

と歌いました。

このときの陸奥国からの金の献上は、これを受けた聖武天皇の詔にある「黄金は人の国より獻ることはあれども、この地には無きもの念へるに」ということばを見ても、まことに偶然のことのように見えます。また一般に、この金の産出も大仏造営に関してのみ取りざたされていますが、はたしてそうでしょうか。このときの陸奥の国の国司が百済王敬福であったことは、注目されなければなりません。中央政府は、早くから陸奥国における金採取の情報を得ていて、大仏の鍍金に間に合わせるべく、最新技術の保持者であったであろう百済王族を陸奥国司に任じた可能性も考えられるとおもいます。そして、いったん陸奥から金が産出したとなれば、そののち中央政府は、それをそのままに放置していたとは考えがたいでしょう。大伴家持の歌にも詠われたとおり、「こがね花咲くみちのく」のイメージは、なにも、のちの奥州藤原三代や、黄金商人吉次をまつまでもなかったのです。

平安時代初期の中央政府による東北経営も、桓武天皇の「正朔の施すところ（天皇の政治 区宇外無し）」（『統日本紀』延暦八年七月甲寅条）という理念にもとづいたたんなる領土の拡大という政治上の問題にとどまるものではなく、このような経済的視点も見落とされてはならないとおもいます。『伊勢物語』の「みちのく」観も、したがって、単なる文学的なユートピアに終わるものではなく、このような背景のもとに成立してきたものとおもわれます。

さてこのようにして早くから成立した「みちのくユートピア」観は、その後の時代に受け継がれていったと考えられます。近世ともなれば「みちのく」のエリアはさらに北上して北海道南部までひろがりますが、古代に「勇悍」とのみ見られた蝦夷人のなかに素朴と柔和さを見、かれらの反乱は倭人の横暴さによって誘発されるのだという記述の中には（「みちのく観の成立」参照）、蝦夷人の社会にひとつのユートピアを見ているところがあります。また江戸時代における安藤昌益の「みちのく」観、そして近代における石川啄木や宮沢賢治の「みちのく」観、とくに宮沢賢治が「イーハートヴ」と呼んで岩手の地を理想化したことはよく知られたところですが、本日の後半のお話の中で、それらはまた分析されるでしょうが、近世・近代における外からの東北観について、取り上げることのできなかつたことは少し残念です。たとえば、松尾芭蕉が「奥の細道の旅」を志した理由などの中に、また『奥の細道』そのものの分析などを通じて、興味ぶかい問題が出てきはしないか、なども考えています。しかし、本日のテーマに触発されて、そのあたりを深めてくださる方が出てくれば、このたびの企画も成功といえましょう。

（同志社大学教授）